

【地域活動ノート】

## 「疑わしくは行動せよ！」J-DAG (Just-Disaster Action Game) を活用した地域連携・教育実践例の紹介

飯塚智規\*

### 活動の概要

J-DAG (Just-Disaster Action Game) とは、大地震発災直後の緊迫した状況をリアルタイムで模擬体験し、減災のための「適切な判断と行動力」の習得と「防災体制」の検証ができる、実践的訓練ゲームのことである。このゲームを開発したのは、横浜市内で主に防災活動を行っている市民団体である「防災塾・だるま」（塾長は神奈川大学の荏本孝久教授）である。ゲームといっても、その内容は事実上、災害対応の図上シミュレーション訓練であり、本来であれば行政職員が受けなければならない、質の高い訓練である。筆者は防災塾・だるまの協力のもと、学部の地域イノベーション（現、地域防災政策）の講義で、毎年度学生に訓練を受けさせている（2020年度はオンラインでの開講のため未実施）。また鶴ヶ島市地域活動推進課の依頼で、2020年2月19日に鶴ヶ島市富士見市民センターにて、鶴ヶ島市内の自治会等の住民代表達を対象に本訓練を実施し、地域防災力の向上に寄与する活動を行っている。

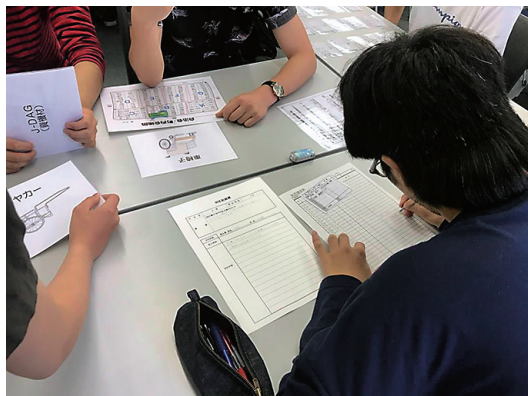
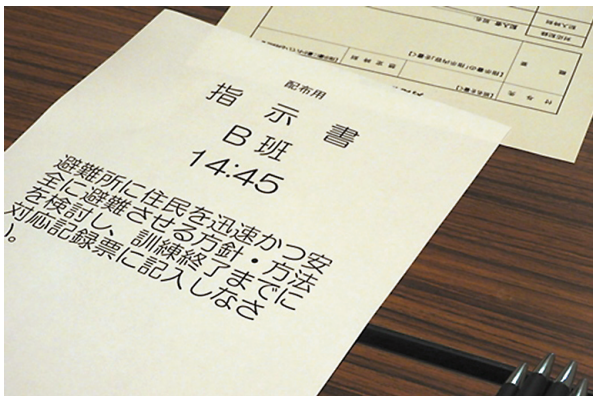
キーワード：鶴ヶ島市、J-DAG (Just-Disaster Action Game)、地域防災、図上シミュレーション訓練、防災塾・だるま

J-DAGの目的・内容は、訓練に参加したメンバーが仮想の自治会・町内会の役員となって、いくつかの班に分かれて図上で災害対応の指揮を執る、というものである。災害対応の具体的中身は、町内の住民の安否確認や資機材の管理、情報の収集・報告等である。受講者達は本部と複数の班に分かれて災害対応を行う。本部と各班には、①トランシーバー、②地域住宅地図、③住民リスト、④安否確認表、⑤資機材配備表、⑥地震情報、⑦対応記録票が用意されている。受講者達は訓練開始とともに、自分の班の住民リストを確認し、安否確認を行わなければならない。しかし架空の町内会で実際に安否確認の行動を取ることはできないので、住民の安否情報が世帯ごとに記載されている直後家族情報カードの置かれたデスクに行き、自分の班の住民のカードを全て探し出して自分の班に持ち帰り、安否状況を確認して安否確認表に記入しなければならない。

また訓練中に、コントローラー（訓練運営者）から指示書が各班に配布される。そこに書かれた内容については対応を検討して、どのような対応をすべきか対応記録票に記載しなければならない。消火や搬送など、指示によっては資機材がなければ対応できないものもある。その場合には、受講者は備蓄庫のデスクから、必要な資機材のカードを借りてこなければならない。班と班との間の情報連絡のやり取りは、口頭で直接行うのではなく、各班に用意したトランシーバーを用いて行うことになる。

---

\* 城西大学現代政策学部助教



訓練中に配布される指示書（左）と、対応記録票へ記載する様子（右）



トランシーバーでの連絡のやり取り：左は鶴ヶ島市での訓練、右は地域防災政策での訓練の様子



左は資機材カードによる資機材の管理、右は直後家族情報カードによる安否確認の集計の様子

ここで紹介している活動の詳細については、以下を参照してください。

城西大学ホームページ： <https://www.josai.ac.jp/news/20200220-01.html>

飯塚智規（2019）「地域防災というテーマを通じて受講者達は何を学び何に気づいたのかー地域イノベーション I Aにおける3つの取組からー」『城西現代政策研究』12巻1号